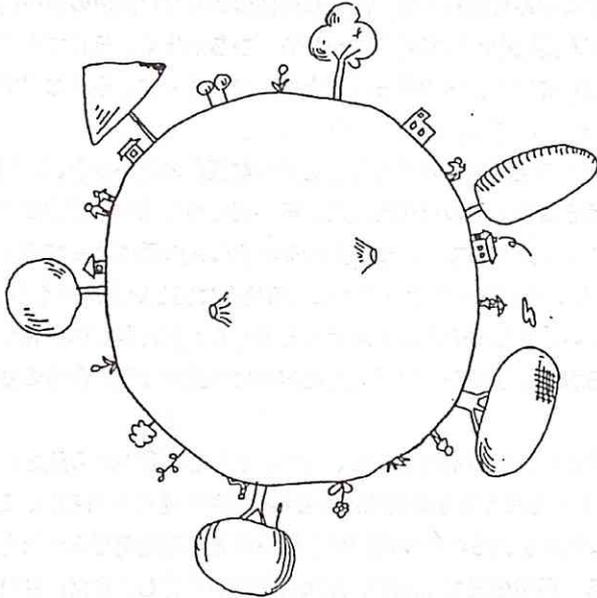


緑の宇宙線

目黒修治

36億の人々と約200万種にのぼる生物をのせて宇宙のすみっこに浮んでいる緑の船・地球。何十億年もかけて自然の進化が創りあげてきた緑の船が今病んでいると言う。



生物達はそれぞれ異った生活をいとなみ、お互いに食ったり食われたりしながらも死に絶えたりせずに、たくみにバランスを保って生きてきた。気の遠くなるような永い時間が創りあげた絶妙なシステムである。彼らは力を合せて有限の空間と資源を開発・利用する一方でお互いに制約し合っているので、この自然のシステムの中では一種の生物だけが暴走することは許されない。仮にネズミやバク等がたまたま大発生することがあっても食糧不足や天敵などのため長続きはできない。これが生物界にバランスを保たせている生態学的な原理である。

約200万種の生物の中で、この原理に逆らっているのは「人間」だけである。人間は自らの生命をおびやかす脅威に対し、知識と技術をもって克服し、際限も無く増え続けてきた。

我々の祖先は自然の中から生れ、自然の恵みによって生かされて来たのだろうが、我々の発展は好むと好まざるにかかわらず反自然の方向へ進んでおり自然から遠ざかる一方である。自然には

復元力がそなわっている。手にケガをしても数日たつと傷口が閉じ、木の枝を折っても春になれば再び萌芽するように、自らの力に応じた復元力を持っている。人間の進歩(=自然の破壊)がこの許容範囲の中にあるうちはあまり問題にはならないかもしれない。しかし、許容範囲を越えた時、魚のおよがない川と鳥の鳴かない空と草木の生えない土が残されてしまうだろう。

草木が一本も生えない砂漠がすごい速さで拡大していると言う。砂漠に追いかけて逃げまどい、死んでゆく多くの人々。熱帯のジャングルがすごい速さで切り倒されていると言う。このまま進めば近い将来、世界の気候が変ってしまうだろう。うそみたいなホントの話である。北方文化を育ててきたブナ林が伐採されようとしている。形而上の価値はソロバン勘定ができないから、材木にして測るつもりなのだろうか。人間の文明がいくら進んでも、どれだけ努力しても、生物としての人間の性質は昔から少しも変わってはいない。生きるためには植物を食べ、動物をも食べねばならないし、呼吸する空気や飲み水だって棒切れを持ってイノシシを追いかけていたころとほとんど同じ程度の質でない健康にはくらせないであろう。文明の進歩?がもたらした自然への負荷が、そのまま人間の最も生物的部分に対してシッペ返しとなつてはね返って来ている。もしかすると人間は、御釈迦様の手のひらの中で小さな雲に乗って飛びまわっている猿のようなものかもしれない。

食物連鎖を見れば、葉緑素を持たないものは消費者である。さしずめ人間は大食漢と言うところか。太陽の恵みを緑の葉っぱの皿にのせて口に運んでもらっている知識をもった胃袋、それが人間。だから植物の安定した生育なしには我々の生存は有り得ないと言える。植物を大量に枯殺することは、今立っている足下の大地をすくうこと、種を絶滅させることは脳細胞をつぶすことと同じであろう。私自身が生きながらえるためには、まず植物がより良く生きながらえることが必要。そのためには、植物を知ることから始めなければならない。同じ宇宙船の乗組員なのだから。

引用文献 吉良竜夫 生態学の窓から
(めぐろ しゅうじ (株)グリーンシグマ)

